

## 子規の滑稽俳句を探る その二

暮目良雨

### 死はいやぞ其のきさらぎの二日灸 子規

この句は明治二十五年、満二十五歳になる年の作品だ。二十二年五月に喀血し、それでも俳句の面白さに取りつかれて各地へ旅を重ねたり、小説『月の都』を執筆したりと学業より俳句や小説にうつつを抜かしていた頃。学年試験の不足分を受けるために勉強の準備をしようと大宮の宿に泊まったり、本郷に家を借りたりしてみたが、結局、頭に浮かぶのは俳句のことばかり、ノートの余白に書き、足らねばしまいにはランプシェードにまで句を書き連ねた。

喀血の恐ろしさはうすうす知っていたので「死はいやぞ」と打ち出したのだが、「其のきさらぎの」中七の措辞は、西行の「ねがわくは花のしたにて春死なんそのきさらぎの望月の頃」の歌をそのまま下敷きにしている。子規らしいのは下五に「二日灸」を据えたこと。喀血の心配より、旅に出たくて三里に灸をすえてまだまだ遊ぶつもりであったことと推察するとこの句の面白さが増すだろう。この楽天さが子規の滑稽俳句の源である。

虚子にも『春夏秋冬』春之部人事「二日灸」に

釋迦が死んだ其如月の二日灸 虚子

という句が残っているが、滑稽さにおいては子規に及ばない。

おそろしや石垣崩す猫の恋 子規

恋に狂ったものは猫に限らず恐ろしい、況や人間においておや。花街神楽坂に二十五年間住んでいろいろ見聞させてもらったが、哭く、喚く、刃物を持ち出す人間様と少しも変わらず、猫も哭き叫び爪の刃物を振り回して己の欲情を満たしてしまう。木造の家の密集している花街は、隣家との境の黒塀の笠木が猫の恋の通り路になる。猫のための専用通路である。そして密会の場が瓦屋根の上となると恋の修羅場になった屋根の上では瓦がずれたり落ちたりすることもある。石垣を崩すことなど昼飯前の事である。

猫の恋のほうが人間より素晴らしいのは終わった後に一切の感情を残さないことにある。

うらやまし思い切るとき猫の恋 越智越人

こちらは恋の経験者の句だ。子規にも本物の恋をさせてあげたかっと思ふ。

五月雨や畳に上る青蛙 子規

こんな光景を見るには朽ちた木造家屋に住まねばならぬ。子規の句として鑑賞すれば、病人と青蛙のほかに五月雨の音だけが聞こえる世界。貧しい生活を楽しめるのは痩せ我慢でもいいから滑稽を楽しむ心を持ち続け

ることである。滑稽からペーススが自ずと滲みだしてくる。

(続く)